

## 国際森林年第一回国内委員会 議事概要

日時:平成 22 年 12 月 16 日(木)10:00~11:00

場所:農林水産省第 2 特別会議室

出席者:(国内委員)天野委員、飯塚委員、出井委員、内山委員(鳥居日本新聞協会専務理事が代理出席)、草野委員、佐々木座長、ニコル委員、仁坂委員(澤野和歌山県森林・林業局長が代理出席)、沼田委員、速水委員、広瀬委員、宝月委員、宮林委員、養老委員

(オブザーバー)

溝畑観光庁長官、星野環境省自然環境計画課長

(事務局)

篠原農林水産副大臣、皆川林野庁長官、末松林野庁林政部長、古久保林野庁国有林野部長、本郷林野庁計画課長、池淵林野庁木材利用課長、上田林野庁海外林業協力室長

(篠原副大臣あいさつ)農林水産省副大臣の篠原。お忙しいところ委員を引き受けていただき、また本日ご出席いただき心より感謝申し上げます。来年は 25 年ぶりの国際森林年である。森林・林業を巡る情勢について昨今の TPP の絡みでご報告申し上げたい。農林水産省として関税を全てゼロにするということで試算したところ、手法にもよるため過大とも言われるが、農業の GDP8 兆円が半減すると見込まれる、4 兆円の影響を受ける。林業は 500 億円だが小さな額ではない。これまで関税ゼロの影響をもろに受けてきたのが林業である。1951 年の占領下の日本において関税自治権が無く、丸太の関税がゼロになった。次いで 1964 年に外貨割当制度のせいで木材関係はほとんど関税がゼロとなった。その結果、杉の丸太の価格が一番高かった頃よりも 7 割減じ、物価調整をすると 20 分の 1 くらいになっていると思われる。90%あった自給率も一時は 18%にまで落ち込んだ。その結果中山間地が疲弊した。1970 年には日本の集落数は、14 万 2 千集落あったが、2000 年までには 7 万 5 千の山村集落が消えている。これは、日本の木材が売れなくなったからである。

こういったことから、我が政権、菅総理自身も、森林・林業施策に以前から力を入れている。国際森林年関係でも適当な予算が付く見込みである。今日は皆さまのご意見をいただき、この執行にも活用させていただきたい。

(林野庁長官から、資料 1 に沿って説明)

(林政部長から、資料 2 及び資料 3 に沿って説明)

(佐々木座長) 本日は今後の方針、テーマについてご意見いただくとともに、日頃皆さんお考えのことについてお話しいただきたい。

(天野委員) 副大臣より国際森年年は 25 年ぶりとお話しいただいた。長官からは森林・林業再生プランの委員のうち自分が路網の委員になっている旨をご紹介いただいた。自分としては、25 年ぶりの国際森林年を活かす観点から資料3のテーマについてコメント申し上げたい。私は日本ペンクラブ環境委員会に属しているが、同クラブで数年前小中学校の教科書に「林業」がどれだけ取り上げられているかを調査したことがある。その結果数年もの間「林業」の文字が消えていることがわかった。こういった状況の中、森林・林業再生はきわめて重要であり、世界でも有数の森林率を誇る日本としては、国際森林年に際してこれを重いテーマとして取り扱えば良いと考える。

(速水委員) 私は三重県で林業を営んでいる。日本人は「森林は大事」と言うことはしょっちゅう話としてあるが、森の中に入って森を見ていくことが下手であると常々思っている。キリスト教のような一神教の国と異なり、日本では未だに森には魍魎魍魎や八百万の神がいるというように、森が恐ろしい対象との観念が抜けきれないのではないか。このため森に入っていくことがうまく出来ず、森に関する理解を深める障害になっているものと、林業をやりながら考えている。林業を営むものとして、森林・林業再生元年というのはとても大事なポイントと考えており、この促進はありがたい。ただ、対立の意見を申し上げるつもりはないが、その点において国民の理解を深めるためと考えると、「森の中へ」「森を歩く」などのように「森の中に」という印象のものをテーマとして、「森林・林業再生元年」が副題になるような産業が後にくつつく形の方が、せつかく森林全体を捉える年としては望ましいと考える。

(出井委員) 私はこれまで日本のメーカーに勤めて来た立場から、資料1の12ページに説明があった輸入材が多いという点に関心がある。なぜ輸入材が圧倒的に多いかというと、戦後の頃の木材需要を輸入材でまかなうシステムが依然として残っているから。このため、せつかく植えてもこれでは意味がない。国産材がしかるべく使われる必要がある。二次産業(製造業)である住宅産業や林業をやっている大きな会社も外国で木を植えることにお金をかけているような実態であり、植えて使うバランスをとるように、国内の仕組みを変える必要があるのではないか。このために経団連で委員会を作ってもらったらどうか。私は何度も植樹祭などに出たことがあるが、とりわけ植えることに注目されがち。だが、私は木を使うことがポイントで、メーカーをうまく巻き込んでいける仕組みを整える必要があると考えている。委員になった企業に自

分のこととして捉えてもらってはどうか。机を作っているメーカーなど大きな利益を上げている会社に、国産材を使っても利益を上げるような仕組みを作るといったことが大事。第一次産業は衰退し、第二次産業も衰退しつつある昨今、「第一次と第二次のかけ算」が重要だと考える。

(ニコル委員)今の意見には大賛成である。私は最近 50ha の山に国産材のみでセンターを建設した。炭を使える厨房で、暖炉もあるが、コストはそれほどかからなかったものの、流通の仕組みに不自由し資材をそろえるのに大変苦労した。木材を入手するシステムを開発しなければならなかった。それでも、ナラ、オオヤマザクラ、ミズメなどのいわゆる雑木も 50 名分の家具に活用するなどして完成にこぎ着けた。やろうとしたら出来るのだ。だから、日本の森で合理的で安全に木材を伐採でき木材を利用できる技術が発達することを応援してほしい。

またもう一点、我々の森を管理する森番の松木さんは、既に 75 歳。彼ほど知識のある人はもう居ないと思う。本物のフォレスターを作してほしい。せつかく森をつくっても営林署の中で 30 年間同じ森林と付き合ったようなフォレスターなどいらっしやらないと思う。We need the foresters on the ground. On the ground, we need the people in the woods. 勤務場所をしょっちゅう変えてほしくない。僕は森づくりを 26 年やって、少し成果がある。例えば、絶滅危惧種は 26 種戻った。山菜 137 種、薬になる植物 196 種がある、そして癒しとして森を使っている。僕に出来るのだから、日本の国が出来ないわけが無い。It's the system and people and people's techniques.

(宮林委員)今のご意見、私もそう思っている。70 年前の産業構造を見れば、大半が農林業。そしてその子供達が日本をしょって立っていた。今はサラリーマン層が大層。このような中で山に関わる人々が変わってきた。先ほどの京都の絵図を見ても、近場の山では結構植えていたのが分かる。生活の中で山や木や水、そしてその中で人を養っていくようなメカニズムが相当出来ていたのではないかと思う。多様な森林に対する期待が高まっている中で、国民各層に森林を分かってもらうのであれば、暮らしの中に森林を位置づけるということが大事だと思う。そのためには、「人づくり、森づくり、木づかい」ということをベースにしながら、再生プランや、歩く、伝えるということも盛り込んだようなテーマがくれば収まるのではと考える。

(宝月委員)世界の生産林率は 30%、日本は 40%となっており、つまりそれ以外は木材生産以外の森である。国際森林年ということであれば生産林に限らず公益的機能も含めてトータルで捉えられテーマの方が良く、林業再生に絞り込んでしまうのはどうかと思う。ある意味茫漠としているが「森を歩く」とかの方がピッタリしている。

(広瀬委員) スーパー林道が出来たおかげで、南アルプスなどへのアクセスがとても良くなりありがたかったが、その後林道は森を「破壊」する物となって、その後の敷設が廃れてきたと思う。国際森林年のテーマとしてふさわしいのは、日本の森を知ってもらう、森を歩くことだと考えている。百名山が出来て素人衆が森を歩くようにはなっているかもしれないが、例えば森林へのアクセスがもっと良くなり帰りには温泉があるようなところで、50 ほどの歩きやすい森で、いろんな木を覚えたり出来るようなところがあったらよいのではないか。そうすればそこには、道も出来、道が出来れば間伐もでき、作業にも効率的になるのではないか。破壊に恐れをなすのではなく、森に親しむ観点での林道があっても良いと考える。

(草野委員) 私ふるさとが岐阜の山奥。資料 1 の最後に飛騨の山林の例が取り上げられていたが、私はまさに「ザ・里山」というところで育った。今は東京暮らしの方が長くなったが、都会において特に感じるのは、自然と隔絶されていて、自分からかなり積極的にならないと身近に自然と関われないと言うこと。故郷を捨てた良心の呵責みたいなもあって、何か森のために出来たらと思っている。振り返ると学校教育で当然のごとく山と関わることが出来たことも、素敵な思い出となって、自分ももっと自然にふれあいたいという願望に繋がっているのかもしれないという気がする。林業に関わる人が、私の子供の頃周囲に 10 人に 7,8 人いたが、今は 1,2 人という状況。もちろん林業も再生してほしいが、まず森林に「関わる」「親しむ」というところからでないと、たぶん、今これほど「木が使い物になっている」実態を国民の大半が知らず、どう関わるのかも知らないままになってしまわないかと懸念。多くの人がまず「どう関わるか」を主眼においたテーマがより良いと思う。

(飯塚委員) 副大臣のご挨拶の中にも 7,500 の集落が消滅したと言うお話があった。また、今は 8,000 の限界集落があって、放っておくと同じ道を歩むと言うことも心配している。話題の中心は森で、森で学ぶ等といったことは非常に良いことだと思うが、こういう限界集落にこそ本当の森や林業の担い手があると考えている。この人たちが暮らしていける、現状を脱却できるような体制づくりや支援を先に議論すべきだと考えており、色々意見をもらえたらと思う。

また、古い人間なので、かつて歌謡界や紅白歌合戦で、「与作」や「年輪」という歌が非常にヒットして、口笛を吹き、カラオケでも歌ってきたが、40 年くらい森に関する歌が無い様に思う。新聞広告等でのアプローチは記載されているが、広瀬委員も関わっていらっしゃるし、この機会に親しみやすい歌や映画を作るのも世論づくりの中で進めていければよいと思う。

(仁坂委員(代理)) 本日は知事が県議会のため失礼をしている。お手元に和歌山

県の全国植樹祭のチラシをおいている。テーマは「緑の神話、今 そして未来へ 紀州木の国から」。このテーマを決める際にも「未来」ということに着目。解説にもあるように、誰に伝えていくのかを考えると、時代を担う子供たちに伝えていこうではないかとなり、テーマとなった。理念としては「郷土の森」。森の資源を有効に活用することも重要と考えているが、もっとも大事なものは、森を育ててきた文化をどう伝えていくかと言うこと。たぶん 50, 60 代の方はそれぞれ自然に親しんできたと思うが、それを今一度思い出してお孫さんたちに伝えていただきたい。今回の和歌山県植樹祭では、子供たちを中心としたイベントを繰り広げたいと考えている。記念に植えていただく木も子供たちが育てており、子供たちの手で作り上げた苗木を用いることで、「種を育ててもらおう」という趣旨で未来につないでいこうと思っている。このように誰に伝えるのかをテーマに入れていただければ幸い。

(養老委員) 森を歩くと健康によりというとは誰もがご存じだと思う。都会を歩いた後と森を歩いた後の認知度は森を歩いた後の方が良いという結果がでるのは当たり前の話であり、こういうことを学問的にやらなくてはいけなくなっているのは問題。昨今、皇居の周りを走っている人が多いと言うが、一般の人の知見だけでは当てにはならないので専門的に確認される必要がある。一次産業の衰退にもそのあたりの感覚が影響していると思う。

今、こういう会議を行っているが、農林水産省の方が具体的に毎年どのくらい森の中で過ごしているのか、霞ヶ関ではどうなのか調べておられるのか。先般国土交通省の会合に出た際の担当課長は年のはじめに 3 週間の有給休暇を持っていると言うことで、全く休んでいないと知った。国際森林年に際し、職員に強制的に年次休暇を取得させ、森に行かせる、間伐の仕方を習うといったことも有効だろう。お膝元がやったらどうかと思う。今年をきっかけにこれからも続けていってほしいと思う。他人のことを言う前に自らやらせたらいかかがか。森と人間の関係が失われていることが根本的な問題である。

(ニ科尔委員) 私は物書き。もともと英語圏の人間だが 5 歳まではケルト語を話していた。エチオピアでも働いたことがあるが、国籍は日本。(どこの国でも) 人との感情がとても大事。西洋ではフォレストはヒーローである。悪者を退治するヒーローと同じ。森を作らなければならないと考えている点で皆さんの意見と同様だが、特にどうやって国連で人の感情を動かすかが大事だと考えている。

(佐々木座長) 様々なコメントに感謝する。資料3について副大臣にも皆さんのご意見を聞いてもらったので、これらを踏まえて決めてもらいたい。テーマ 1 に了解をいただいた方もいれば、森林・林業再生元年も大事とのコメントをいただいたところ。私自身

の立場ではここで決めることは出来ないが、委員会の要望としてお伝えしておきたい。テーマ案を基本としつつも、産業的側面も含め、いろんな方々が関わるということを引きつり納めたようなものを文言も内容も含めて、委員の皆さまのご意見を踏まえてご検討をいただきたい。含まれる問題が複雑だということが分かるものにしてもらえるようにと思う。テーマ案がいけないと言うことではないが、中身についてよりご検討いただきたい。

個人的には養老委員の意見に大賛成。出井委員や天野委員のご意見も含めてきめていただきたい。活動計画や、国連への報告、記念会議等に関する議論は次回にと言うことでご了承いただきたいが、ご異論のある方はいらっしゃるか。

(会場から異議なしの声)ありがとうございます。

(事務局)本日の議事概要は事務局が作成し、座長に確認いただいてからホームページで公表の予定。資料もホームページで公表する。また、今後も特段の問題のない限り同様の取り扱いとさせていただきます。

(佐々木座長)もちろん何か支障が出てくれば相談させていただく。

(林野庁長官)本日はお忙しいところお集まりいただきましたことに心より感謝。各委員及び座長からのお話を踏まえてテーマを決めさせていただき、ご連絡くさせていただきます。

また、養老委員のご意見を踏まえ、森林・林業に携わる自分たち自身が森林に携わることを考える必要。来年は10日間は年次休暇を取得して山に入ると心に決めた。職員にも勧めたい。今、観光庁長官が到着されたので一言お願いしたい。

(観光庁長官)本日は参加させていただき感謝。観光立国日本を唱っているところ、日本の森林の魅力を是非これに活かしたい。様々な切り口があり、グリーンツーリズム、エコツーリズムはもちろん、山に登ること、スポーツツーリズムそしてヘルスツーリズムに至るまで、森は関わりがある。また、お土産コンテストなどもある。様々な面から国際森林年に協力させていただきたい。